

## &lt;全体分析&gt;

|                         |          |
|-------------------------|----------|
| 試験時間                    | 2科目で150分 |
| 現代システム科学域、生活科学部は1科目で90分 |          |

## 解答形式

記述・論述・描図・選択・マーク

## 分量・難易 (前年比較)

分量 (減少・やや減少・変化なし・やや増加・増加)

難易 (易化・やや易化・変化なし・やや難化・難化)

設問数はやや増加したが、難易度は変化していないので、取り組みやすさは大きく変化していない。

## 出題の特徴や昨年度との変更点

例年どおり、解答用紙に答えのみではなく、途中経過も含めて記述させる形式の問題であった。

## その他トピックス

特になし。

## &lt;大問分析&gt;

| 番号  | 出題形式           | 出題分野 (テーマ)        | 範囲 | コメント (設問内容・答案作成上のポイントなど)   | 難易度 |
|-----|----------------|-------------------|----|--|-----|
| 第1問 | 問形式<br>(記述)    | 力学<br>(等加速度運動・衝突) | 物理 | 等速運動する板と、投げ上げられた小球とのくり返し衝突に関する問題であった。問3までは基本的な等加速度運動の式を適用すればよいが、問3の結果より、その後、同じ運動を繰り返すことに気付けば後半の問題が解きやすくなる。                                 | 標準  |
| 第2問 | 問形式<br>(選択・記述) | 電磁気<br>(コンデンサー回路) | 物理 | 3枚の極板からなるコンデンサー回路に関する問題であった。<br>問3からは極板Bの電気量が保存されることに注意して解けばよい。  | 標準  |
| 第3問 | 問形式<br>(記述)    | 波動<br>(ドップラー効果)   | 物理 | 前半は、観測者が聞く音波の周期からドップラー効果の式を導出する問題が出題された。後半は、単振動する音源から発する音波の最小振動数と最大振動数を問う問題であった。音源が最大の速さ $u$ で遠ざかっているとき最小振動数、近づいているとき最大振動数が観測されることに気付けばよい。 | 標準  |

※難易度は5段階「易・やや易・標準・やや難・難」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

## &lt;学習対策&gt;

教科書を中心とした基本事項の理解に努め、標準的な入試問題を演習しておくこと。

設定された状況を問題文から正しく読み取る読解力を身につけ、記述・論述の答案作りを練習すること。